

喪女への異常な愛情または黒木智子は如何にしてぼっちで あることを止めて友だちから愛されるようになったか

今 田 雄 三

(キーワード：現代日本人論、ぼっち、オンラインコミックス、日本神話、ヒルコ)

1. はじめに

我が国においても物語を心理学的に分析する試みが数多くなされてきている。スイス・チューリッヒのユング研究所に留学した河合隼雄は、ユング心理学において物語や神話の中に見出される普遍的無意識や元型などの観点から分析が行われていることに習い、帰国後10年以上を経て『昔話の深層』(1977)を上梓した。本書の題材はグリム童話を中心とした海外の昔話であり、ユング派分析家である von Franz がユング研究所で行ったおとぎ話に関する連続講義(後に『おとぎ話の心理学』(1970/1979)として纏められ出版されている)の影響を多分に受けていることは河合隼雄自身が本書のあとがき等で述べているとおりである。その後、河合隼雄は分析対象を日本固有の物語へと移し、『昔話と日本人の心』(1982b)では日本の昔話を分析した。その後も内外の児童文学を取り上げて論じた『子どもの本を読む』(1985)、『ファンタジーを読む』(1991)、『物語とふしぎ』(1996)など、河合隼雄が子どもの本を通じて子どものこころを理解しようとする姿勢は一貫しているように思われる。一方、1989年から日本の古典文学をテーマとした対談シリーズが雑誌『想像の世界』に随時掲載され、後に『物語をものがたる』(1994)、『続物語をものがたる』(1997b)、『続々物語をものがたる』(2002b)として出版されるとともに、源氏物語を分析対象とした『紫マンガ 源氏物語の構図』(2000)、様々な日本の王朝物語を分析した『物語を生きる 今は昔、昔は今』(2002a)として結実している。また河合隼雄以外にも、ユング心理学にその基盤を置く臨床家による物語の心理学的分析として『絵本と童話のユング心理学』(山中, 1985)、『昔話と夢分析』(織田, 1993)などが知られている。さらに現代日本を代表する作家の一人である村上春樹の作品を分析した『思春期をめぐる冒険』(岩宮, 2004)、『村上春樹の「物語」夢テキストとして読み解く』(河合俊雄, 2011)などがある。なお『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』(1996)で両名は対談した間柄であり、河合隼雄の弟子と実子がそれぞれ村上文学をテーマに取り上げていることには奇縁を感じさせられる。

このように、河合隼雄の物語研究はその大半は文学を対象としたものであったのだが、漫画について論じたことがあるのはあまり知られていないと思われる。これは『現代青年の感性—マンガを中心に』(1979)と題する論考であり、『岩波講座 子どもの発達と教育』という叢書の第6巻に収載されている。当時は青年期の若者がマンガを読むことが完全に定着し、市民権を得た時代であり、本論文ではつげ義春の『沼』、ジョージ秋山の『アシユラ』などについて論じられている。また同年に共同通信社・京都新聞に連載されたコラムにおいて、河合隼雄は白土三平『赤目』、長谷川町子『いじわるばあさん』、水木しげる『ゲゲゲの鬼太郎』、萩尾望都『ポーの一族』、池田理代子『ベルサイユのばら』、竹宮恵子『風と木の詩』、松本零士『銀河鉄道999』、鴨川つばめ『マカロニほうれん荘』、大島弓子『綿の国星』といったマンガ作品を取り上げている(河合ら, 1979; 河合, 1993に転載)。これらの論考を読み直してみると、率直なところ河合隼雄のマンガという表現メディアへのコミットメントは児童文学や王朝物語に向けられるそれと比べ些か控え目で距離を感じる。ほぼ同時期に作家の橋本治が『花咲く乙女たちのキンピラゴボウ 前篇』(1979)、『花咲く乙女たちのキンピラゴボウ 後篇』(1981)、『熱血シュークリーム 上』(1982)で当時のマンガ作品を論じたような思い入れの強さは感じられない。要するに河合隼雄はマンガやアニメーションといったサブカルチャーメディアの作品をネイティブ対応で語れる世代ではなかったということなのだろう。この領域に関しては、山中(2002)はやや例外的な存在として、週刊マンガ雑誌(1959年に『週刊少年サンデー』および『週刊少年マガジン』が同時に刊行開始)や連続TVアニメーション(1963年に『鉄腕アトム』が放送開始)などが普及した1960年代以降に子ども時代を送った世代が自らの血肉として作品を論じることが可能のように思われる。例えば SUPER STRINGS サーフライダー21 という AI 研究者を中心に結

成されたメンバーによって企画され、精神医学・心理学・教育学・法律などの専門家によって執筆された『「あしたのジョー」心理学概論』（1993）なる書籍において、高森朝雄・ちばてつや作「あしたのジョー」の主人公である矢吹丈を初めとする作中人物に対する心理分析が行われている。また前掲書に寄稿した一人である川寄は『天才 柳原教授の癒セラピー』（2002）において山下和みの『天才 柳沢教授の生活』を題材にサイコセラピーのプロセスについて論じている。また岩宮（2000）は『講座 心理療法1 心理療法とイニシエーション』に掲載された『思春期とイニシエーション』という論考の中で夢枕獏原作・岡野玲子画の『陰陽師』を、『フツの子の思春期』（2009）でほったゆみ原作・小畑健画の『ヒカルの碁』を、『好きな人にはワケがある』では宮崎駿監督作品である『となりのトトロ』『魔女の宅急便』『もののけ姫』『千と千尋の神隠し』『ハウルの動く城』を取り上げて思春期のころについて考察している（なお、序章ではTVアニメーション『海のトリトン』について語られているが、岩宮のこの作品へのコミットメントの深さには感涙を禁じ得ない）。さらに横田（2006）は、芸術学部出身で大学時代はアニメーション制作に関心をもっていたという経歴を生かし、また高畑勲を初めとする日本を代表するアニメーション映画の監督にインタビューを行い、アニメーションのキャラクター、心理的表現、アニメーション作家のライフサイクルなどについて多角的に論じている。なお、かくいう筆者自身もスタジオジブリ制作のアニメ作品である『となりのトトロ』と『火垂るの墓』および『コクリコ坂から』を取り上げ、過去（昭和30年代）と現代の青年像・子ども像の違いについて論じている（今田、2014；2016）。

このように、文学やマンガ、アニメーションなどの物語作品やその登場人物について心理学的に考察する研究について概説したが、本論文では谷川ニコ作『私がモテないのはどう考えてもお前たちが悪い！』（以下『わたモテ』と表記）について、まず主人公である女子高校生、黒木智子（以下、智子と表記）の心理と行動について作品のストーリー展開を追って検討する。特にコミックス第8巻から第9巻に掲載された「修学旅行編」において、それまでいわゆる「ぼっち」状態にありクラスに友だちがいなかった主人公がどのようにして友だちを持つことが出来るようになったのかを中心に考察する。次に、筆者が繰り返し述べているように（今田、2013；2015）、人間関係の成立を個人の努力のみに還元するのではなく、個人を超えた力の存在や、自分に対する守りの存在を実感するという現象が『わたモテ』の作中でどのように成立しているのかを検証する。そこから更に発展させて、河合隼雄がライフワークとして論じた日本神話論における最大の課題である「ヒルコ」の帰還がいかに実現されるのかについての些か大胆かつ奇妙な仮説を提出する。そこから、現代のいわゆる「ぼっち」状態や「ひきこもり」といった問題に新たな観点がもたらされることを期待したい。

2. 『わたモテ』の主人公・智子の心理と行動について

谷川ニコ作『私がモテないのはどう考えてもお前たちが悪い！』は、2011年8月からスクウェア・エニックス社のウェブコミック配信サイトであるガンガン ONLINE 上で連載中（2020年9月：論文執筆時において）のマンガ作品であり、コミックスは累計330万部を突破（2020年3月：第17巻発刊時点）した人気作である。英語圏の画像掲示板「4chan」で話題を呼んだことがきっかけになり、日本国内の「2ちゃんねる」などでも人気を博したことからブレイクしたという些か変わった経緯が話題となり（高橋、2012）、2013年7月から9月まではテレビ東京系でアニメ化もされている。さて連載第1回目（『わたモテ』の各エピソードの表記は、原則として「喪● モテないし〜」という形式で統一されている。ちなみに連載第1回目のエピソード表記は「喪1 モテないしちょっとイメチェンするわ」である）の冒頭、中学3年生の3月、15歳の智子は自室のPCで「喪女（もじょ）」の定義についてネット検索している。ブラウザ上には以下のように表示されている。

喪女と呼ばれる定義は

- 1 男性と交際経験が皆無
- 2 告白されたことがない人
- 3 純潔であること

そして智子は勝ち誇ったような顔でこう呟く。

なるほど…要するに、男にモテないブスのことか…私は違う私はモテる！

そんな私がだ来月から…JKだ！人生で一番モテる時期！何もしないでもフラグが立ち性が乱れる3年間！

現実の女子高生になる日が待ち遠しい！

しかし2ヵ月後、高校の教室の隅の自席に座り一人で昼ごはんのお弁当を食べる智子の姿が描き出され、彼女の心の眩きはやがて叫びとなって心中に響き渡るのであった。

おかしいな、女子高生だが二か月近く高校生と会話していないぞ…5月も半ばだがどうなんだこの状況？

いやまだあわてるような時間じゃない…男も友達もこれから作ればいいんだし…

(楽しそうに談笑するクラスメートたちの姿を目にして)

あわてる時間じゃ…あわててあわわわ…あわわわわわわ!! あばばばばば!!!

……………っ悔しくねーし!!

あんな風に勝手にグループ作ってる女なんて どうせ男のことしか考えてないバカだし…

あんなバカ女と一緒にいる男なんてどうせクズしかないし…

あんな奴らと群れるくらいならぼっちでいいし！

いやぼっちというかソロプレイを楽しんでいるだけだし

化粧してスカート短くして 男に媚びるなんて尻軽がすることだし

せいぜいカス同士でベタな青春でも送って下さいよ

かように、『わたモテ』の読者は、人生で一番モテる筈のJKになったものの一人も友だちが出来ず、それどころか話をする相手も見つからないという状態に置かれた主人公の姿を目撃することになる。入学前に「喪女」のことをディスっていた言葉が盛大にブーメランとなって我が身に降りかかってきたことで精神的ダメージを受けつつも、級友たちを心中毒づく言葉のキレ具合の小気味よさが強烈な個性を放っている。だが、この面白さがこの時点では作中では誰にも届いていないのが何とも哀しい。「喪5 モテないし宿る」では、智子が「私はおとなしくないし 本当は明るくて面白い子なんだ!!」と魂の叫びを上げる場面があるが、智子は本当に面白い子である。何しろギャグマンガの主人公なのだから、というメタな発言を試みたくなるのも、既に筆者自身が智子の面白さに「蠱惑」されているためなのかもしれない。ともあれ、ここから智子はモテるため、友だちを作るための「おもしろうてやがて悲しき」試行錯誤の歩みが始まるのである。ちなみに、本作品は基本的にギャグマンガなのであるが、作品世界の中では現実同様の時間経過がきちんと描かれており（本論文執筆時点で、智子は高校3年生の夏休みを迎えている）、また前回の出来事がリセットし「なかったことに」されたりするようなこともなく、作中人物の心理描写や人間関係も仔細かつリアルに描写されており、そういう意味では本格的なストーリーマンガとしての鑑賞に堪えうるものであることを断っておきたい。

3. 智子の苦闘の軌跡を振り返る

智子の絶えざる努力とその結果を表1-1（高校1年時）と表1-2（高校2年時・修学旅行以前）にまとめた。改めて一覧表にして通覧することで、智子の「現状から脱却したい!」というモチベーションの高さ、着想の意外性と豊かさ、着想を実行に移す行動力、失敗しても諦めない不死鳥のごとき不屈のメンタリティー（後に智子自身は「人間強度」と表現している）には敬服を禁じ得ない。ただし、残念ながら自己分析や周囲の環境や状況を冷静に分析し、何が問題なのかを見抜き、それに即した最適解を見出す力を持ち合わせているとは言い難い。熱量と努力は人一倍なのに、それが空回りした状態のまま、智子の花のJK1年目は空しく過ぎて行く結果に終わった。

特に「喪19」では2学期の席替え後、智子が予備の机と椅子に囲まれた屋上の上がり口のスペースを見つけ「教室は私の居場所じゃないここが私の居場所だ…」と思うようになった矢先、文化祭準備のため机と椅子が運び出され、「居場所」を失って呆然とする姿や、「喪26」で高校入学前に夢見していた居場所を実現しようと部活動「日常部」を申請するが、現実には活動内容不明につき非承認とされ、智子は自宅の自室で「日常部」が承認された白日夢に陥る様子などは、ギャグマンガとしての自虐的な笑いが成立するかどうかギリギリの表現であるように思われる。筆者の精神科医兼臨床心理士兼公認心理師という専門性の見地からしても当時の智子は心理的に極めて危機的状態にあったと思われる（「なぜ作者が主人公を精神的に殺しにかかっているのか？」という懸念すら感じるレベルで…）。高校1年生時点での智子の支えは、①家庭的には比較的恵まれていること（「中流」という

今は失われつつある安定した経済状態を支えてくれている様子が行間から読み取れる父親の存在、智子が極度に言動を踏み外さない限りは基本は優しい母親、姉をウザがりながらも根底では見放さず相手をしてくれる1コ下の弟・智貴)、②中学時代の親友で今は別の高校に通っている成瀬優(ゆうちゃん)の存在、③文化祭以来、何故か智子のことを気にかけてくれる2年生の先輩、今江恵美の存在、④そして智子自身の趣味(ゲーム、ネット検索、マンガ、ラノベなど)に浸ることであろうと作中からは読み取れる。

表1-1 主人公・黒木智子が友だちを作るために取った行動とその結果の一覧(高校1年生時)

	回	智子の置かれた状況およびそれに対する行動	結 果
1学期	喪1	ネットでモテ女子のトレンドを検索しイメチェンを試みる。	帰宅した弟・智貴に「うわっ!?すげーブス!?!」と驚かれる。
	喪2	担任に挨拶しようとしても出来ず、弟・智貴と会話の練習をする。	担任・コンビニ店員と挨拶できる(あまり自然ではなかったが)。
	喪5	雨宿り中に他校の男子高校生たちから話しかけられ、面白いことを言おうとしてスベる。	智子がうたた寝している間に男子高校生たちがコンビニで買ってきた傘を置いて行ってくれる。目覚めた智子は傘があることを訝しみつ「一度でいいから男の子にやさしくされたい……」と思う。
	喪6	乙女ゲーをすることでエストロゲン分泌が活性化され美人になると推論し連夜ゲームをやり込む。	寝不足・不摂生で顔色、目の下の隈がさらに悪くなる。
	喪8	かわいい下着を着れば自分に自信が持て友だちや彼女が出来るのではと思い、中学時代の親友・成瀬優(ゆうちゃん)を誘って下着を購入する。	間違っポケットに突っ込んでいた下着をハンカチだと勘違いして教室で取り出し汗を拭いたのを同級生の男子たちに目撃され、トイレで下着を引き裂く。
	喪10	無表情・無口キャラはかわいいと思い一日それを演じてみる。	関わる相手がいるから無口というキャラが立つことに気づき、自分には特別なことが起こらないと気づき心を乱す。
	喪12	一学期の終業式の日、誰かと花火を見たいと思い、誘おうとする。	誘うためのきっかけ作りに無理があり誰にも気づかれず。偶然居合わせた男子中学生と花火(とラブホの部屋の覗き見)をする。
夏休み	喪15	雨宿りの際傘を置いていってくれた男子高校生・小坂くんと偶然図書館で再会。緊張しながらも会話をする。翌日小坂くんが彼女と勉強しているのを目撃するが「彼女持ちならそう緊張せず話せ、友だちになれるかもしれない」と思い直す。	智子がいとこの里崎希心(きーちゃん)に小坂くんのことを彼氏だと吹聴し、それを真に受けたきーちゃんが小坂くんが二股をかけていることを抗議する。小坂くんは迷惑かけた責任を取るために智子は土下座し、(引きつった)笑顔で小坂くんは許してくれる。この一件できーちゃんは智子のことをゴミを見るような目で見えるようになる。
	喪18	夏の終わりに哀しい気持ちになり、上を向こうと流星群を見に夜の公園に出かける。	流れ星を見つけ「男と星が見たい」と願ひ事をし、オスねこ出合って載れる。二学期に「次のステージへ行かない」と決意する。
2学期	喪19	席替えて教室の真ん中の前の方の席になる。近くの席にはリア充的な子ばかりで「ストレスで胃が蜂の巣になる」と感じる。昼休みに席を外すと女子グループに自分の椅子を取られてしまい教室でお弁当を食べることも出来ず校内を歩いていると屋上の上がり口に予備の机と椅子が仮置きされている「居場所」を見つけ、昼休みはそこでお弁当を一人で食べ、入り浸るようになる。	ある日、文化祭の準備のため机と椅子が運び出され「居場所」がなくなってしまう。お弁当を食べることが出来なかった智子は午後の体育の授業中に脳貧血で倒れ保健室で休む。放課後、誰もいなくなった教室で智子は一人でお弁当を食べる。
	喪20	文化祭の準備で特に仕事を振られなかったが、何かしないと後で文句を言われると思いクラスの女子に手伝いを申し出る。	女子たちからは却って気を遣われるが、ちらしのコピーをとる作業を手伝うことになる。不注意でカッターナイフで手を切ってしまう大騒ぎになるが幸い傷は浅く保健室で処置してもらい事なきを得る。
	喪20	校内放送を聞き体育館の椅子の設置を手伝いに行く。	文化祭実行委員長である2年生・今江恵美から「楽しい文化祭にしようねー」と声をかけられる。
	喪21	文化祭二日目の朝、校門で実行委員長の今江先輩に「おはよう 今日の本番だね昨日はどうだった」と声をかけられる。	智子は「えっ? えー その」としか返事が出来ず、他の委員から声をかけられたのに対応している間に智子は寂しそうに去っていく智子の背中を見て今江先輩は何かを感じた様子で立ちつくす。
	喪21	文化祭の二日目にゆうちゃんを呼び、クラスの奴らに自分にも可愛い友だちがいると自慢できると思う。	実際には初日にクラスの出し物でメイド衣装を着ていないのに智子が見栄を張ってゆうちゃんにそのように伝えていたため、「もこっち(ゆうちゃんが智子を呼ぶ時のあだ名)のメイド姿見たかったなー」とのゆうちゃんの発言に同級生の岡田茜に不思議そうな顔をされる。
	喪21	ゆうちゃんと一緒に自分も文化祭を楽しめるかもしれないと期待する。	ゆうちゃんに抱きつかれて安心し寂しさがまぎれ、一時だがぼっちの自分を忘れられた。
	喪21	ゆうちゃんにもう一度抱きしめて欲しいと願う。	そのことを言い出せないまま、時間がきてゆうちゃんは帰ってしまう。その後智子はマスコットキャラの着ぐるみから風船をもらい、ギョと抱きしめられて驚く(着ぐるみには今江先輩が入っていたのだが、そのことを智子はわらなかった)。
	喪22	新しい席に慣れた。昼休みにトイレに行かず座っていれば席を取られることもないと気づいた。	昼休みに自分の席で(一人で)昼ご飯を食べることが出来るようになった。
	喪26	冬になり寂しさを痛感するようになる。高校入学前に夢想していた居場所を実現しようとして部活動「日常部」を生徒会に申請する。	「日常部」が出来、部員が入部してくれたことを喜ぶ智子だったが、母の声に我に返ると自分の部屋でぬいぐるみを新入部員に見立てた白昼夢に陥っていたことに気づく。実際には「日常部」の申請は活動内容不明につき非承認であった。
	喪28	他クラスの男子生徒から清田くん(智子の前の席の男子)を呼んで欲しいと頼まれる。	「いきなり話しかけるの無理」「名前で呼ぶとかもって無理」と思いつつも、智子が何か用事ありげにしているのを察した清田くんから声をかけられ、ものすごく緊張して声を詰まらせながらも、何とか要件を伝えることができた。
	喪28	TVでNo.1キャバ嬢が口下手で人見知りだったというインタビューを見て、自分もキャバクラで働けば人とうまく話せるようになるかもしれないと考える。	歌舞伎町に「下見に」行ったところ、キャッチセールスやボン引きなどの様子にすっかりビビっていたところを携帯に母から着信が入り震える声で「すぐ帰るから」と伝える。
	特別編2	クラスのクリスマス会にそこまで行く気はなかったが、母からおこづかいをもらい、服装は学校では大人しい奴と思われているだろうから(逆に)格好いい系でいこう、髪型も学校とは違う感じにしようと思つた弟・智貴のヘアワックスを断りませず勝手に使い、イメチェンしたことでクラスメイトから注目され、話しかけられるのではと想像し、少しだけ楽しみになってくる。	集合場所に早く着きすぎ、幹事役の女子生徒二人(岡田茜と根元陽菜)と全員揃うまで一緒にいなければならないことを躊躇し、どこかで時間を潰してからギリギリで戻ってこようと思つた時、前から同じクラスの子たちがやってくる。何て挨拶しようと考えているうち、相手は(普段と違う服装・髪型をした)智子に気づかず通り過ぎる。物陰からだんだん集合するクラスのメンバーが楽しげに談笑する様子を眺めるが、とてもその輪の中に入る勇気が湧かず、ゲーセンや中古書店で時間を潰し帰宅する。母から「楽しかった?」と訊かれ、「うん……まあまあ楽しかったよ」と答える。自宅に戻り「明日は一人で普通の日を過ごそう……苦しくないさみしい一日を過ごそう……」と思う。
3学期	喪34	席替えて教室の真ん中の席になる。自分の悪口を言われていないか、スマホのビデオ撮影機能をオンにして席を外し、後で再生して確かめようとする。	誰も自分の悪口を言っている様子はない、というか誰も自分のことなんか話しておらず、クラスの中で「いないもの」扱いされているのかなと感じる。「自分から声かけたアピールしなかったとはいえ……もう三学期なんだからいいもの対策終了して私のこと認識してくれてもいいのでは?このまま空気として三学期も終わるのかな」と考える。
	喪34	授業中の教室にゴキブリが出てクラスが騒然とする中、自分がゴキブリを処理すればクラスの注目の的になれるのではと考え、自分の方に走ってきたゴキブリを躊躇なく踏み潰す。	上履きを洗って教室に戻ってくると周囲の生徒が智子の席との間を空けている。上記と同様の方法で自分が離席した間の周囲の会話を確認すると「大人しい子だけと黒木さんってなんかおかしいね」「つーか引くわ…普通踏むか」と(違う意味で)皆の話題的になってしまったことに気づく。
	喪37	卒業式で在校生代表の今江先輩の送辞を聞き、「あの人みたく色んな人との関係を築けばこの卒業式も感動できるものになったのかな…(無理だけど…)」と思う。	卒業式終了後、ぼっちとおおしき男子の卒業生に声をかけられてしばらく会話し、お互いに写真を取り合ったりする。「来年はどんな卒業式になるんだろ…」と思う。

高校2年生になると、僅かずつではあるが智子を取り巻く状況に変化が見られてくる。①まず、2年生でも同じクラスになった根元陽菜(ネモ)が時々智子に話しかけてくるようになった(1年生の時点では智子とは全く絡

みのなかった彼女がどうして智子に話しかけてくるようになったのか、実は深い理由があるのだが、2年に進級した時点ではそうした裏設定は全く提示されていないため、智子は声をかけられて嬉しい反面、どう関わったらいいのか分からず、2人の関係が進展するのは高校2年生の冬に差しかかるのを待たねばならない)。②体育教師である荻野先生が担任になり、再三智子に友だちを作る努力をするよう促すようになった(荻野は智子のことを「自分から友だちを作る気持ちがない生徒」と見ており、「本人自身が友だちを作ろうと思えば友だちが出来る筈」という、高校教師であるにもかかわらず、たとえば土井(2008;2014)が指摘しているような現代の日本の若者に特有の友だち作りの難しさや友だち関係を維持する上での負担の大きさをあまり理解出来ない人物のように描かれている。言い換えると、智子に友だちがいないのは「自己責任」であり、その克服のために智子の「個人的努力」を要求する荻野の姿勢は一貫して描かれている)。③中学時代の同級生、小宮山琴美(こみさん)と再会したこと(中学2年生の頃、智子とゆうちゃんを含めた3人グループで過ごしていたが、智子とは基本的に仲が悪く、中3でこみさんだけがクラスが別になり疎遠になっていた。最初友だちになれると期待した智子だったが、中学時代の遺恨を思い出して決裂。以後はお互いに友だちだとは認めていないものの、遠慮なく本音で罵倒し合える仲、という奇妙な存在となる。また、ゆうちゃんとこみさんの再会後は、「ゆうちゃんを悲しませない」ために彼女のの前では仲良くしようとする努力はお互い払うようになる)。

このように、2年生の2学期を迎えた時点で、智子は(友だちとまでは言えないが)「話しかけてくれるクラスメイト」や「他校に共通の友だちがいて、気は合わないが遠慮なくものを言い合える他クラスの子」がいる状態になっていたことになる。また、担任からの「友だちを持とうと努力しなさいっ!」というプレッシャーを折りにふれて受けつつ、修学旅行を迎えることになる。

表1-2 智子が友だちを作るために取った行動とその結果の一覧(高校2年生時・修学旅行前まで)

	回	智子の置かれた状況およびそれに対する行動	結果
1学期	喪39	1年生でも同じクラスだった根元陽菜(ネモ)から声をかけられ、(スベってしまふ結果になった)1年生の時の智子の自己紹介が面白かったのを覚えていると言われ泣きそうなくらいうれしくなる。	ネモから智子がすごく面白い自己紹介をしてくれるだろうと皆に話したと言われ、普通に自己紹介をしようと思っていたのを急遽変更し結果2年生の自己紹介も盛大にスベる。その後クラス内でスベったことを「黒木さん状態」と呼ぶ流行語を作ったがすぐにすたれる。
	喪40	クラスでマンガ雑誌を読み、お菓子を食べていれば周囲から声をかけてもらえると考え実行する。	1週間経過した時点で担任の荻野先生から呼び出され、「もう少し友だちを作る努力をしなさい」とダメ出しされる。
	喪41	ぼっちである辛い現実から逃避し甘えるのは止め自分に厳しく、現状を打破するためにポイント制で人と会話するノルマを自分に課し、達成できなければペナルティを課すことを決める。	やってみるとクラスの誰かに話しかけるのは難しく、仕方なく弟・智貴と話してノルマを果たそうとして、ぼっちだと勘違いしていた弟・智貴が実は同性・異性の友人たちから普通によく話しかけられている様子に逆上し、自分へのポイント制を放棄。智貴の行動をポイント制でカウントすることに執心するようになる。
	喪42	あいさつ運動で担任・荻野先生に「そういえば友だちはできた?」と尋ねられ返答に窮する。	居合わせた生徒会長・今江先輩が「私、この子と仲いいですよ」とフォローしてくれるが、荻野先生からは同じクラスに友だちがおらず教室で一人きりなのが問題なのだとダメ出しされる。
	喪42	1年の時より話しかけてくれる人が増えているのは確かだと感じ、何かが変わり始めているのかもしれない、今だったら自分から変わるかもしれないと思う(1年生の時調理実習の材料を渡さずに早退したため班の全員からひんしゅくをかったことを反省する)。	勇気を出して家庭科の調理実習班のメンバー(委員長・三家さん)に食材を渡した(家庭科の時間には、おそらく親しくないメンバーと一緒に実習をするのを避けるため保健室でずる休みをしていた)。
	喪43	女子トイレでの噂話を耳にし、男の裸を見れば他の女子より上に立てるのではと思いつく。	HR中にスマホで男性の性的な画像を閲覧しているのが担任の荻野先生に見つかり激怒される。ほんの一部の女子にだけ男の裸(ち●こ)に詳しい黒木さんとして一目置かれる。
	喪44	勉強のやる気が下がりが成績が右肩下がりとなり、中間試験で平均を下回ったら予備校行き決定と思われ、何とかして成績を上げる必要に迫られる。家では集中できないとお洒落なカフェで勉強しようとするが、勉強に意味を見出せないから集中できないことに気づく。	カフェで隣の席で仕事をサボりPCでアニメを見ていた若い男性サラリーマンが智子にもさりげなく見えるようにしてくれ、全話見終わった後、声をかけてくれ少し話す。それから「勉強しようかな」という気になり何とか平均点をクリアし予備校通いを免れる。「とりあえず今はレールに乗ってほっと生きている」という心境に達する。
	喪46・47	図書館で中学校の同級生だった小宮山琴美(こみさん)と再会する。同じぼっち同士、本の趣味も合っているようで、友だちになれるかもと期待する。	小宮山さんが実は中学時代にゆうちゃんや弟・智貴を巡って確執・遺恨のある相手だったことを思い出し、以後底辺争いをする間柄になる(お互いに相手のことを友だちだとは認めていないが、遠慮なく本音をぶつけ合う奇妙な関係)。
	喪50	夕方の教室という環境で一人でいれば補正で美少女(それなり)に見え、物語のヒロインのように誰かに見つけてもらえるのではと思いつく。	担任の荻野先生が窓から校庭を見ている智子に気づき、テニスをやりたいのだと勘違いして強引に校庭に連れていかれ練習を促される。
	喪51	ネモからリップクリームを使う?と薦められ、彼女の見た目からアニメキャラのように百合的な意味で自分が好かれていると考える。	ネモと岡田茜との会話をトイレで耳に挟み、「ネモは女なら誰でもいいのではないかと」疑い、「人を弄んで!」と腹を立てる。廊下で足を捻って転んだところを通りかかった今江先輩が介抱するが、「実はこの人も自分のことがそういう意味で好きなのでは?」と恐怖する。
	喪54	ゆうちゃんと待ち合わせてカフェでお茶をしているところに偶然小宮山さんが現れ、再会を喜んだゆうちゃんに智子と小宮山さんを仲良くさせようとされ、夏休みに三人でどこかに行こうと誘われる。	翌日たまたま登校時に一緒になった智子と小宮山さんはお互いごちない会話をする。中学時代「こいつと仲良くになりたいとは思っていなかったが、昔は仲良くしようとはしてたのか」と思い出す。
	喪56	ネモから制汗スプレーを使うかと声をかけられた智子は、自分は気付いていないが周りの人からはもしかして臭いと思われているか気になり始める。以前ゆうちゃんにももらった香水をつければいい匂いがすると思いつく。	香水の使い方を知らず大量に付けたため智子の体から異臭が放たれているが周囲は遠慮して指摘しない。廊下で偶然すれ違った弟・智貴から「一応言っとくがすっげーくせぞ」と指摘され愕然とする。
	喪57	終業式の帰り、ゆうちゃん・小宮山さんとカフェで会う約束をしていた智子は、バス停で偶然小宮山さんと一緒になり、そのまま同じバスで移動することになる。	隣同士の席に座るものの特に会話はなく、陰鬱な雰囲気になることもなかった。ゆうちゃんと合流後、改めて夏休み三人で一緒にどこかに行こうと誘われる。小宮山さんが一緒なのは気が進まないものの、去年よりはマンな夏休みを送りたいと多少のことは目をつぶろうと思いつく。
夏休み	喪64・65	ゆうちゃん・小宮山さんと昆虫採集・コミケ・海水浴に出かける。	まあまあ楽しめた(こうやって女同士で萌え豚のアニメのように何ごとにもく夏休みが終わるのもいいのかな)。
	喪66	夏休みも終わりが近づき、死ぬほど学校に行きたくないと感じるが、9月1日までにメンタルをもっていこうと鏡に向かい「お前は学校が好きだ」と繰り返しつぶやき、自己暗示をかけようとする。	智子の様子を不審に思った智貴が「鏡の前 奇行 問いかけ」でネット検索すると、姉の行為は精神が不安定な状態になる危険な行為だと認識する。翌朝、いつの間にか学校が始まってしまった夢を見た智子は、半信半疑で智貴に確認し、現実にはまだ夏休みが終わっていないことに歓喜する。智子の異様な様子を見た智貴は、正気を取り戻させようと「目覚ませ!」と思い切りピンタをくらわす。

4. 修学旅行編を読み解く

『わたモテ』のコミックス第8巻から第9巻にわたって描かれるのが、本作中における最大のターニングポイントである、いわゆる「修学旅行編」である。それまでクラス内に誰も友だちがいなかった智子に友だちが出来、永遠に続くと思われていたぼっち生活から脱することになったきっかけが高校2年生の2学期（10月）に行われた修学旅行であった。この修学旅行編以前の『わたモテ』は、繪内（2011）の言うところの同じ失敗を繰り返し、その失敗経験で笑いを取る学習障害型のマンガの典型であったものが、それ以降では失敗経験を糧にして主人公と仲間たちが成長していく成長発達型の作品へと変貌を遂げており、数あるマンガの中にあってかなり特異な作品であると言って差し支えないように思われる。

作中で智子が修学旅行に関してどのような言動をとり、それがどのような結果に至ったのかを表2-1、表2-2、表2-3に示した。表2-1の最初に掲載されているように、智子は早くも1年生の1学期から修学旅行についてネガティブなイメージに圧倒されている様が描かれている（喪7）が、いわゆる「伏線」と解釈することも可能だろう。その後、修学旅行に関する作中での表現は2年生になってからに移るが、どう見ても智子は修学旅行に期待や楽しさを抱いているようには思えない。この後どのような展開を経て、彼女にとって修学旅行はかけがえのない体験になっていくのだろうか。

班決めの際に、誰とも組んでもらえぬいたたまれなさを回避するため、智子は早退を決め込もうとする。だが担任・荻野の強引でデリカシーの欠如した対応によりクラス全員の前で「自分と班を組みたい相手など誰もいない」ことを突きつけられ（いわゆる「公開処刑」状態）、あげくに咄嗟の言い訳めいた発言を荻野が真に受けたことで、智子は「ぼっちと余り者」の集団である第四班の班長に決められてしまう。「ぼっちでも余りものでも集まれば一人じゃないんだ修学旅行を楽しめるかもしれない…少しだけ頑張ってみよう……！」と思い直した智子が同じ班のメンバーに旅行中の班行動の予定を相談するが、「どうでもいいよ」「別になんでもいいよ…」といった反応しか返ってこず、「さすがぼっちと余りもの…ろくな奴がいない」と、この時点での班のメンバーへの印象は最悪であった。

表2-1 修学旅行をめぐる黒木智子の言動とその結果（旅行前）

回	智子の置かれた状況およびそれに対する行動	結 果
喪7	生徒たちが修学旅行のことを話題にしているのを耳にし、「……修学旅行か 来年……」と意識する。	智子の脳裏に「私服」「写真」「班分け」「三泊以上」「部屋割り」「バス新幹線飛行機座席決め!!!」「自由行動」「パーベキュー」「深まる男女仲」「夜みんなで恋話」「ハイテンション」「お風呂」「部屋に来る男子」などといった想像しにくい修学旅行に関するイメージが次々に湧いてきていたたまれなくなる。
喪49	修学旅行アンケートが回ってくる。行きたくはないがどこかしら行かなくてはいけないという心境でコンピューター室で行き先を調べる。どこに行きたいかより行きたくない場所を消去法で外すと最後に京都が残る。	「人生で一番わくわくしない旅行になりそう」「寺とか神社って興味ないんだよね」とどんどんテンションが落ちてくるが、気を取り直してネットで「絶対に京都へ行きたくなる動画」を再生し始めるもすぐトイレで席を外す。戻ると京都のPR動画の前に人だかりが出来ており、口々に京都がいいと言っている。アンケート結果で京都が1位になる。智子は「修学旅行にも京都にも行きたくない奴の行動によってみんなの行き先が決定するとはな…」と皮肉な結果を内心静かにかみしめる。
喪66	夏休みも終わりが近づき、死ぬほど学校に行きたくないと感じた際、「今年は修学旅行もあるし本気で行きたくない」とも思う。	9月1日までにメンタルをもっていこうと鏡に向かい「お前は学校が好きだ」と繰り返しつぶやき、自己暗示をかけようとする。
喪67	2学期の席替えて担任が「友だち同士に好きに組め」と言い出さないかひやひやする。	その際「地獄を味わうのには修学旅行の班決めだけにしたい」という連想が浮かぶ。
喪68	リア充グループ（ネモ、岡田さん、清田くん）が修学旅行の日程や買い物のことを楽しそうに話しているのを聞きする。	「教室全体が修学旅行で浮かれてて朝からつかれるな（まだ先だろうが）」と思う。
喪69	ぼっちとして参加する修学旅行は一番じゃないにしても人生の中で結構辛い体験になるのではないかと、と思い、修学旅行に班決めの当日早退しようとする。	担任・荻野先生に早退を願い出ると「じゃあ今黒木だけ修学旅行の班決めめちゃうのか？」と言い出され、一緒に班になりたい人を聞かれても答えられず、「どうして修学旅行でも誰とも仲良くしようとしんないの!!」と叱られそうになり、苦し紛れに「今回班決めで余ったり組めない人がいいそうなので、そういう人と私は組んであげたいと思って」と言ってしまう。真に受けた荻野先生がクラス中に声をかけるが智子と組みたいという生徒は誰もおらず、いわゆる「公開処刑」状態になる。
喪69	同じクラスの田村ゆり（ゆり）と田中真子（真子さん）が修学旅行の班決めを巡って口論しているのを偶然耳にする。トイレで誰かが「吉田さんとかちよっと苦手なんだよねー」という噂を聞く。	自分以外にもぼっちになりそうな奴がいて智子は安心する。
喪69	班決めの翌日登校すると、智子は4班の班長になっており、メンバーは吉田茉咲、田村ゆり、内笑美莉（うっちー）に決まっていた。「恥をかけた上班長になったのは想定外だけど、ぼっちと余りものとして流されるまま誰かの後をついて行く旅行よりマシンかもしれない、ぼっちでも余りものでも集まれば一人じゃないんだ。修学旅行を楽しめるかもしれない…少しだけ頑張ってみよう……！」と思い直す。	同じ班のメンバーに旅行中の班行動の予定を相談しようとするが、うっちーは「（他の班の友だちと一緒に行動するつもりなので）どうでもいいよ」と言われ、吉田さんは欠席、ゆりは「（友だちと同じ班になれずふてくされていため）別になんでもいいよ…」という反応しか返ってこず、「さすがぼっちと余りもの…ろくな奴がいない」と、智子の心にむなしさが去来する。
喪70	仕方なく班長である智子が一人で班行動の予定を作成する。旅行中に着る私服をモールに買いに行くが、同じ高校の生徒が大勢いて気まずくなり、映画を見て時間を潰して高校生がいなくなるのを待とうとする。	「一人でなんでもできるんだから いっその世界から誰もいなくなればいいのに……そしたらきっと一人でも寂しくないし不安も感じないのにな……」と思いつつ映画を見ていると、適当に選んだ映画が異常に怖い内容で、ふと見るや館内に誰もいないことに気づき、怖くなって映画館を抜けだし、「誰か! 誰でもいいから!!」と（普段なら気まずくて自分から近づくことはしない）よく知らない同じ高校の女子生徒たちの近くで買い物の品定めをしながら次第に安心を取り戻す。「とりあえずこの世界にお前らが存在することを許してやるよ（一人で帰るの怖いし……）」と心の中でうそぶく。

そしていよいよ修学旅行の日がやってくる（表2-2）。初日、ホテルの部屋に入った智子は「全く仲良くない相手と寝食を共にしなければならない苦行」を覚悟する。メンバーのうち1人は、早々に自分の友だちがいる隣の部屋に行ってしまう、残る2人に智子はしどろもどろながら声をかけるが何の反応も返ってこず、「生ゴミ

喪女への異常な愛情または黒木智子は如何にしてぼっちであることを止めて友だちから愛されるようになったか

やうんこと同居してる方がマシなレベル…!!」と精神崩壊の危機を予感する。

2日目の班行動は、別の班の友だちと一緒に回るため1人が抜け3人での旅行となる。智子は朝から寝起きの悪いヤンキー風のメンバー（吉田さん）をくすぐって起こそうとして（不可抗力ながら）セクハラ行為を働いて引っぱたかれ、移動中もおドオドする智子とイラついている吉田さんの間をもう1人のメンバー（田村ゆり）は仕方なく仲裁する。その後も智子は不用意にヤンキーを煽るような発言を繰り返しては吉田さんを怒らせ、その度に助けを求められるゆりは「思えば黒木さんも吉田さんもどんな人か全然知らないな…知ろうとしなかったしそんな二人とこうして修学旅行してるのは何かの縁だったりするのかなあ」とふと考える（傍点は筆者による）。さらに昼食に選んだ店の料理の味が今一つで智子は逆ギレ気味に不機嫌となる（ここまではどう考えてもこの3人が仲良くなりそうなフラグが立つ気配は一切ない）。午後には伏見稲荷を参詣した際、山頂まで登るのを二人から反対された智子は、「この私がわざわざ放課後まで残って貴様らゴミカス共のために計画した予定を…!」と内心激怒し、「二人とも体弱いしゆとりだから頂上は無理か…」とみえみえの挑発をする。するとムキになった吉田さんが「登れるに決まってる」と言い出し、一行は頂上を目指す。だが残りわずかのところで智子は足をくじいて歩けなくなる（最悪の展開である）。だが舌打ちしながらも吉田さんは智子を背負い、息を切らしながらも頂上までたどり着く。山頂から眺める風景は凄くきれいであった（傍点は筆者による）。

表2-2 修学旅行をめぐる黒木智子の言動とその結果（旅行中）

回	智子の置かれた状況およびそれに対する行動	結 果
喪71	疎外感を感じつつ修学旅行に出発する。新幹線の車内でトイレに立っている間に他の女子グループが自分の席のコンパートメントを占有しており自席に戻りづらくなる。	デッキに一人で立っているところを小宮山さんに見つかり、ゆうちゃんに修学旅行中の写真を送って欲しいと言われていたのを思い出し二人でツーショットの写真を撮る。その後空いていた席で寝たふりをしつつ京都に向かう。
喪72	初日の団体での見学が終わりホテルに入る。全く仲良くない相手と寝食を共にしなければならない苦行を覚悟する。内さん（うちー）は隣の部屋に行ってしまう、残るゆりと吉田さんにしどろもどろながら声をかける。	二人からは殆ど何の反応も返ってこず、いたたまれなくなった智子はトイレに立ち「生ゴミやうんこと同居してる方がマシなレベル…!!」と精神崩壊の危機を予感する。
喪73	大浴場で他の女子がアンダーヘアの処理にまで気を遣っていることに気づいた智子は、吉田さん、ゆりが退室し1人になったのを見計らって一人部屋の奥の洗面所で処理を始める。しかし同室者が次々と戻ってきてズボン部屋に置いたままの智子は洗面所から出るに連れなくなる。	最初に帰室して状況を察していたうちーが無言で智子のズボンを洗面所に投げ込んでくれて事なきを得る。しかしうちーは「あんたらとは極力関わりたくないし思い出も作りたくないんだから気をつけてよ」と内心困惑気味に思う。
喪74	2日目の班行動の朝、寝起きの悪い吉田さんをくすぐって起こそうとして（不可抗力ながら）セクハラ行為を働く羽目になった智子は吉田さんから頬を引っぱたかれる。清水寺への移動中もおドオドする智子、イラついている吉田さんの間をゆりが仕方なく仲裁する役回りとなる。	「友だちとケンカしてこの班にいる自分が誰かに取り持ってもらう立場なのに」と思いつつもゆりは二人の間を仲裁する。「思えば黒木さんも吉田さんもどんな人か全然知らないな…知ろうとしなかったし そんな二人とこうして修学旅行してるのは 何かの縁だったりするのかなあ」とふと考えるようになる。
喪74	とりあえず一旦は吉田さんから許してもらった格好の智子だったが、無自覚に吉田さんを「ヤンキー」と決めつけて煽るような言動を繰り返す。	その度に智子から助けを求められるゆりは、「とりあえず今日知ったことは黒木さんって凄くバカってことだな…」という結論に至る。
喪76	昼食に選んだ店の料理の味が今一つで不機嫌になる智子。伏見稲荷で稲荷山頂上まで登る計画を二人から反対され、「この私がわざわざ放課後まで残って貴様らゴミカス共のために計画した予定を…!」と内心激怒し、「二人とも体弱いしゆとりだから頂上は無理か…」とみえみえの挑発をする。	ムキになった吉田さんが登れるに決まってると言い出し、一行は頂上を目指す。だが残りわずかのところで智子は足をくじいて歩けなくなる。舌打ちしながらも吉田さんは智子を背負って頂上までたどり着く。山頂からの眺めは凄くきれいだったが、「苦労して登って良かったでしょ」と臆面もなく言い放った智子にあきれた二人は黙って下山を始め、智子は「あの一足がちょっと」と息願する。
喪77	ホテルに戻った智子、ゆり、吉田さんの三人は疲れから夕食の時間を寝過ごす。吉田さんは外に出て食べれば良いと言ったが玄関先で担任の荻野先生に見とめられる。	事情を説明され、荻野先生が引率してコンビニに夕食を買いに出ることになる。
喪77	荻野先生は智子が班のメンバーと仲良く出来ているか確かめようとする。	「同情されたら嫌だ」と反発する智子は席を外す。
喪77	有料TVカード（アダルトチャンネルが目当て）を買ってきた智子だが、カードを入れても作動しない。吉田さん（普通の映画を見るつもり）がフロントに掛け合いに行く。	学校からの依頼でTVカードは使用禁止になっていた旨を聞かされ、自分がアダルトチャンネル目当てのように教員から誤解された吉田さんは激怒。帰室して智子にヤキを入れる。
喪79	3日目は自由行動で班のメンバー以外とも回れることになっていたが、智子は2日目と同様3人で回るものと思っていた。しかしゆりは真子と、吉田さんはヤンキーグループ3人であるところを目撃し、「裏切られた」と思った智子は1人でホテルを出て嵐山に向かう。	智子は嵐山で、中学校の遠足でも班長をやっていたが自分の身勝手さからその時一緒に回っていた子たちとは疎遠になったのを思い出す。今回も同様だと考えた矢先、追いかけていたゆりたちの姿を見かける。見つかるのはみじめすぎるとその場を離れようとする、今度は小宮山さんとその友だちの伊藤さんに出くわす。智子がぼっちで回っていると思った小宮山さんは智子を入れていいかと伊藤さんに尋ねるが、上から目線で同情されたと思いい反発した智子はゆりたちに手を振ってしばらく一緒に歩いて欲しいと頼む。その後自分が裏切られたのは誤解だったことがわかり、吉田さんから昼食の場所は調べてあるのか、ゆりからはLINEの番号を教えてと言われ、嬉しそうで恥ずかしそうで、泣き出しそう何とも言えない表情になる。
喪79	ゆりは真子も一緒に、吉田さんも智子と3日目も回ろうと思っていたのだが、勘違いした智子がいなくなってしまったのに気づく。	智子が前の晩に「嵐山に行く」と言っていたのを手がかりに3人で智子を探しに行く。お昼前に無事合流することが出来た。
喪80	3泊目は別のホテルに移動し、2人部屋でうちーと一緒にいる。最初はキョーだったような態度だった智子だが、TVの占いの結果をきっかけに自分の方が精神的に優位に立っているかのような言動を取り始める。ところがうちーが初日の洗面所で何をしていたのかを尋ねると一転して無言となり、自分のアンダーヘアの処理のことを皆に言いふらされるのを口止めしようと、うちーの弱みを見つけようと必死になる。	智子の奇矯な言動を不審に思ううちーだったが、次第に智子が自分に性的関心を寄せている変質者ではないかと疑い出し、恐怖に駆られてほとんど一睡も出来ずに翌朝を迎える。帰りの新幹線の中で友だちから旅行の印象を尋ねられるも、うちーの脳裏に浮かんでくるのは自分を執拗に見つめてくる無数の智子の顔だけであった。

表2-3 修学旅行をめぐる黒木智子の言動とその結果（旅行後）

回	智子の置かれた状況およびそれに対する行動	結 果
喪81	修学旅行明け初日、智子は「今日からまた変わらない日々がやってくるわけだ」と思いながら登校する。	下足場でゆりから挨拶され、吉田さんには朝からベタなラブコメのようなやりとり（ラッキースケベと暴力）をする羽目になる。昼ごはんと一緒にと誘われて、ゆりと真子さんと（高校入学後始めて）クラスで誰かと一緒に机を囲んで食べることになり、以後この三人でのランチが恒例となる。
喪81	だが誰かと食事をするのは疲れると感じ、修学旅行中とは違ってゆりたちとうまく話せないことに智子は戸惑う。自分のことを真面目で大人しいと思われていると気づかうのだと考える。女子グループと談笑するうちーを見かけ、「今まで意識もなかったが他人に合わせて生きていくのもぼっちとは別の大変さがあるのかなあ…」と思いつく。「無理して合わせて話すのも面倒くさいし ぼっちでもいいかも…明日から誘われたらどうしよう…」とまで思い悩む。	もうどう思われてもいいから今の自分のイメージを払拭しようと、翌朝の登校途中で出会ったゆりと吉田さんに「実は自分はヘビースモーカーで昨日タバコの火で指をやっちゃった」とうそぶき、二人がビビった様子を見て悦に入っていたが、実は校門前に立っていた荻野先生に全部聞かれており、慌てて「嘘です!!」と弁解する智子の姿を見て、ゆりは「黒木さんって本当バカだよな」と、吉田さんは「本当…何考えてるかわからねえイカれた奴だな」と改めて確信するのだった。

この修学旅行2日目の出来事の中で、この3人が仲良くなる要素はどこにあったと読み取れるのだろうか。智子は吉田さんに不可抗力ながらセクハラ行為（いわゆる「ラッキースケベ」）を働き、ヤンキーへのステレオタイプなイメージに基づいた発言で再三煽って怒らせ、稲荷山山頂への登頂では挑発しておいて足をくじいて背負ってもらおうという貸しを作ってしまった（智子には同情めいたことをされることを嫌うプライドの高い部分がある）。普通であれば智子は呆れられた挙げ句吉田さんから見放されても当然なのに、そうならなかったは何故なのだろうか。その後、作品が書き進められるにつれ、吉田さんの義侠心の強さ、心根のやさしさは少しずつ描かれることになるのだが、「たまたまそういう性格でした」というのではご都合主義のそしりは免れないだろう。

さらにゆりに関しては、最初は内心「友だちとケンカしてこの班にいる自分が誰かに取り持ってもらう立場なのに」と思っており、智子が性懲りもなくヤンキー煽りを繰り返しては吉田さんを怒らせるのを見て「とりあえず今日知ったことは黒木さんって凄いわかってことだな…」と身も蓋もない感想を抱いていた。この時の様子を見てみると、後になって智子との仲に関して「執着」といい程の強い感情をゆりが抱くに至ることなど微塵も感じられない。また、そもそもゆりにはこの時点で友だちと呼べる相手は（同じ班を組めずケンカ中の）田中真子ただ一人であり、自ら進んで友だちを作ろうとしないタイプであることがこの先再三描かれていくため、「たまたま智子との相性が良かったので友だちになった」というのは作劇上からもかなり酷い設定づけとしか言いようがなくなってしまう。そのようなご都合主義的な設定に頼らず、何が彼女らを友だち同士にさせたのか、筆者の解釈を以下に述べる。

智子の担任・荻野先生について述べた箇所でも触れたことにも関わってくるが、そもそも友だちはどうやって作るものなのだろうか？そもそも「友だちを作る」という言い方自体おかしい、というか傲岸不遜な物言いなのかもしれない。「友だちになる」ことは出来ても、意図的・作為的に友だちを「作る」ことは出来ないのかもしれない、という方が真理に近いように思われる。修学旅行を経て、高校3年生になった智子は次第に人との関わりを築くことが出来るようになり、むしろ「友だちの多い」生徒と言って差し支えなくなってくる（表3）。5月の連休の折、高校見学に来た智子のいとこ、里崎希心（きーちゃん）に対して荻野先生は「希心ちゃんの自慢のお姉ちゃんであるように黒木は私にとって自慢の生徒よ 黒木はいつも沢山の友だちに囲まれていてクラスのムードメーカーよ」と話す（喪141）。智子自身は「ど下手が!! 気を使えない奴に限って気遣いアピールしやがる!!（いいすぎなんだよ!!）」と顔を赤くしているが、その後高3の夏休みの時点までにさらに知己を増やした智子の姿を見るにつけ、荻野先生の発言はリップサービスではなく案外と智子の実像に近いとすら思えてくる。しかし、実のところ智子本人にも「ぼっちだった自分に、どうして友だちが出来たのか？」をうまく説明することは難しいのである。3年生になった智子を「先輩」と慕う1年生の平沢雫は「私 女子の友だちが一人もいないんです」と我が身を嘆き（喪132）、「先輩はどうやって友だち作ったんですか？」と尋ねられた智子は「えっ……自然と……かな」と答えるも、「くそ、自然に友だちできるとかぼっちの言葉じゃねーな！こいつ相手だつとい格好つけちまう！」と内心居心地の悪い思いに至る（喪149）。そして結局、どうすれば友だちが出来るのか説明出来ない。

少し時間を遡ると、実は智子は修学旅行の準備の時期に以下のような体験をしている。買い物のためにモールに出かけた際、見知らぬ生徒たちと混じって買い物をする気まずさを避けるため、映画を見て時間を潰そうとした智子は「一人でなんでもできるんだから いっその世界から誰もいなくなればいいのに……そしたらきっと一人でも寂しくないし不安も感じないのにな……」と思いつつ映画を見てみると、適当に選んだ映画が異常に怖い内容でビビり出し、いつの間にか館内に自分以外誰もいないことに気づくと怖くなって映画館を抜け出す。「誰か！誰でもいいから!!」と、よく知らない同じ高校の女子生徒たちの近くで買い物の品定めをしながら次第に安心を取り戻し、「とりあえずこの世界にお前らが存在することを許してやるよ（一人で帰るのが怖いし……）」と心の中で智子は呟く（表2-1）。

要するに、この時智子の心の底から「一人でいることの怖さ」と「誰かと一緒にいたい」という思いが「自然と」沸き上がってきたように思われる。それまでひたすら「一人で」友だちを作ろうとする努力が空回りしていた観のある智子にとって、これは非常に大きな変化だと思われる。「とりあえずこの世界にお前らが存在することを許してやるよ」という強がりめいた言葉の裏に「この世界に私が存在することを許してくれよ」という心の叫びが隠れているように感じられる。このような、自分という存在の芯のような部分を何かが貫いたかのような体験（筆者には、宗教改革の祖・ルターが若き日に落雷に打たれて死ぬかも知れないと恐怖した瞬間、「自分の一生を神に捧げます」と誓ったという逸話がなぜか思い起こされた）が、修学旅行の中で智子と彼女を取り巻く者たちの布置を静かに、しかしまた確実に動かしたように思われる。

喪女への異常な愛情または黒木智子は如何にしてぼっちであることを止めて友だちから愛されるようになったか

そして、先に述べたようにそもそも自己責任や個人の努力で友だちが出来る訳ではない。田村ゆりが「思えば黒木さんも吉田さんもどんな人が全然知らないな…知ろうともしなかったしそんな二人とこうして修学旅行してるのは何かの縁だったりするのかなあ」とふと考えたのも、彼女にとっての「自然」が整った瞬間であったのではなかろうか。彼女は基本的にあまり他人に興味を示さず、真子という気の合う一人の友だちがいて、イヤホンで音楽を聞くという自己完結した世界の中で過ごしてきたように思われる。そんな彼女が「人との縁」というも

表3 黒木智子の交友関係一覧（高校3年生・夏休み時点）

キャラクター名	所属・学年	智子からの呼び名	智子の心の中での呼び名	智子への呼び名	智子との関係など
成瀬優	幕張本郷高校3年	ゆうちゃん	ゆうちゃん・ゆう	もこっち	中学2年生からの親友。
小宮山琴美	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	小宮山さん・こみさん・こみなんとかさん・お前・変態眼鏡盗撮犯・ド変態・そっちに座ってる奴	コオロギ・便所虫野郎・便所コオロギ・メガネ・こみクズ・こいつ・野郎・あいつ・お前・クソメガネ・あのバカ・ド変態メガネ・奴	クソムシ・あんた・お前・黒木さん・こいつ	お互いに「全然仲良くない」と思っている。ある意味親友になってもおかしくないくらい趣味は合ってるが、それでも相容れない。同族嫌悪。嫌いだからこそ、嫌われていいからこそ本音で話せるところがある。
今江恵美	青山学園大学1年	せんばい・会長さん	この人・あの人・会長さん	黒木さん・智子ちゃん	高校1年生の時以来気にかけてもらった恩人である先輩。
根元陽菜	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	根元さん・ネモ・淫乱ピンク	ネモ・淫乱ピンク	クロ	実は高校入試の時に絡みがあったが智子は覚えていない。高2になった頃から智子に時々声をかけてくるようになった。オタク趣味を隠していたが智子の影響で高3の自己紹介でカムアウト。智子とはアニメの趣味は合わない。
田村ゆり	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	ねえ・ゆ…ゆりちゃ…・田村さん・ゆりちゃん	地味なの・こいつ・ゆり・陰キャ・陰の者・むっつり・お前	黒木さん・智子	修学旅行で同じ班になって以来の友だち。無理に話さなくても大丈夫な者同士。今はお互いに親友だと思っている。
吉田茉咲	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	吉田さん	ヤンキー・ビュアヤンキー	黒木・お前・クソガキ	修学旅行で同じ班になって以来の友だち。バイクの二人乗りが見つかり一緒に1週間謹慎を受けた仲。
田中真子	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	真子さん	ガチ●ズさん・ガチ●さん	黒木さん	修学旅行三日目に合流して以来の縁。田村ゆりを交えた三人でお昼を食べることが多い。
内笑美莉	原宿教育学園幕張秀英高校3年4組	内さん	絵文字・うっちー	黒木	修学旅行三日目の夜に同室で宿泊した際に智子からの変質者を思わせる視線を夜通し受けて以来人生を狂わしている。智子のキモさに異様な執着を示す。
井口朱里	原宿教育学園幕張秀英高校2年4組	ちん子ちゃん・ち●ち●妹	ちん子ちゃん・ち●ち●妹	お姉さん	弟・智貴に性的関心を寄せていると智子からは誤解されている。
紗弥加	原宿教育学園幕張秀英高校2年4組	－	ちん棒 (ちん妹の相棒の略)	－	井口朱里の相棒。
加藤明日香	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	加藤さん・明日香	お母さん・No.1・マリアさま・地母神さん・ママ	黒木さん・智ちゃん	2年生の途中から少しずつ交流が始まる。才色兼備で気遣いも出来、理想的な存在とも言える相手に対し智子は緊張し自分の本音やゲスな部分を見せづらく感じていたが、予備校の夏期合宿でより打ち解けた関係に近づく。同じ大学への進学を目指している。
平沢雫	原宿教育学園幕張秀英高校1年	平沢さん・雫	クズ・クソビッチ・清楚ビッチ	先輩・	入試の時に助けてもらって以来智子を慕っている。同級生の女子に友だちが一人もいない。
岡田茜	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	岡田さん	凸	あんた・黒木	親友のネモとのケンカを智子が和解させることになり以後関わるが増える。
伊藤光	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	伊藤さん	コオロギの友・こみなんとかのダチ・止める奴(つっこみ)・こみなんとか係・こみ友	黒木さん	小宮山さんと親友同士。智子と直接会話することは少ない(話題が続かない)。
杏奈	原宿教育学園幕張秀英高校3年6組	－	ヤンキーB	黒木	吉田さんの友だち。ゲーセンで遊ぶ仲間。
麗奈	原宿教育学園幕張秀英高校3年6組	そっち	ヤンキーC	お前・黒木	吉田さんの友だち。ゲーセンで遊ぶ仲間。通学電車の仲で智子と下品な会話に興じた仲。
二木四季	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	－	絵文字MK-II・あいつ・ふしぎなおどり踊りそうなミステリアスな奴	－	球技大会の卓球チームで一緒になる。ゲームセンターで智子と共にヤンキーグループとつるむようになる。
凧	原宿教育学園幕張秀英高校3年4組	－	メガネ・メガネさん	黒木さん	うっちーグループの一人。球技大会や夏休みの予備校合宿などで話すようになる。
宮崎	原宿教育学園幕張秀英高校3年4組	－	みやなんとか	黒木さん	うっちーグループの一人。球技大会や夏休みの予備校合宿などで話すようになる。
かよ	原宿教育学園幕張秀英高校3年4組	－	ばつっん	黒木さん	うっちーグループの一人。球技大会や夏休みの予備校合宿などで話すようになる。
なつ	原宿教育学園幕張秀英高校3年4組	－	－	黒木さん	うっちーグループの一人。球技大会などで話すようになる。
楓	原宿教育学園幕張秀英高校3年4組	－	－	－	うっちーグループの一人。球技大会などで話すようになる。
楠夏帆	原宿教育学園幕張秀英高校3年4組	－	KAHO	－	明日香と仲がよい。智子とは自習室で一緒に勉強した間柄。明日香を介して智子の友人たちが大勢予備校の合宿に参加することになる。
佐々木風夏	原宿教育学園幕張秀英高校3年6組	あん…・あ…あなた	あの剣道少女みたいな奴・ゲスの●み乙女・ゲス乙女	黒木	明日香の友だち。智子とは自習室で一緒に勉強することになり知り合う。合宿で智子と同室となり絡みが増える。
成田美保	原宿教育学園幕張秀英高校3年4組	－	みほ	黒木ちゃん・クロちゃん	明日香の友だち。智子とは自習室で一緒に勉強することになり知り合う。合宿で智子と同室となり絡みが増える。
伊藤良典	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	清田くん	チャラ男	黒木さん	智子とは3年間同じクラス。智子に気さくに話しかけてくれる男子生徒。
和田	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	－	ショタ	黒木さん	お互い少年ジャンプを毎号読む間柄。
初芝	原宿教育学園幕張秀英高校3年5組	－	絵が描ける安藤・安藤	何すか	1年生の時授業の補習でお互いの似顔絵を描いた。高3の夏コミケで会った際再び智子(とその友人たち)を描いた絵を送られる。
仁美	声優養成所所属	－	－	－	コミケで知り合ったネモの先輩。
－	専門学校生	－	－	－	仁美と組んでコミケに出店していた。

のを考えるのは（失礼な言い方をすれば）いささか不似合いである。だが、それは彼女に対し「人との関係というものを真剣に問い直さねばならない」という神託が与えられたという意味合いを帯びてはいまいか（厳しい見方かも知れないが、ただ一人の友だちとケンカしたことでふてくされたり、「誰かに仲裁してもらう立場だと思うけど」と思うてしまう自己中心性がゆり自身の抱える大きな心理的問題であり、まず自分自身が真剣に真子との関係を問い直す必要があるとも解釈され得る）。このように、田村ゆりが「縁」について考えるようになったことが、智子・吉田さん・ゆりの3人の縁の糸が紡がれ、修学旅行から戻ってからも智子を誘って真子も含めた3人で昼食を食べるようになり、智子のぼっち生活に名実共に終止符が打たれることに繋がったように思われる（ちなみにゆりのトレードマークである二つ結びの髪型は、見ようによっては巫女のそれのようにも見えなくもない。だとすれば吉田さんではなく彼女が「縁」について啓示を受ける役回りとなったことにも得心がいく）。

吉田さんは智子から（不可抗力ながら）セクハラ行為を受けたり、ヤンキーへのステレオタイプなイメージに基づく煽りを繰り返し受けるが、そのうち呆れて相手にしなくなっても不思議はないのに、その度に正面から怒りを智子にぶつけ返してくる。これはいわゆる「繰り返しのギャグ」の表現なのであるが、よく考えてみると、今まで智子が様々に着想し、人から関心を持ってもらうきっかけを得ようという努力はことごとく失敗に終わってきた。それは先に筆者が指摘したように、智子には自己や周囲を分析し、問題を特定し、最適解を見出す力が甚だしく乏しいからである。智子の思いつきから出た行動が失敗に終わり、それに誰も絡んでくれないければ、「何がよかったのか」を失敗から学ぶ機会すら得られない。しかし吉田さんという、智子のしくじりに対して、律儀にダメ出しをしてくれる相手が現れたことで、フィードバックが返ってくるようになる。その後の智子は、吉田さんに限らず、次第に他者の反応から自分の振るまいのありようを学ぶようになっていく。失敗は苦いものであるが、一人でスベってしまい放置されればただ「寒い」だけで終わるが、誰かが「いい加減にしなさい！」と盛大に突っ込んでくれればお馬鹿なしくじりも「ボケ」として笑いに昇華する。そういう意味でも吉田さんは智子にとって救いをもたらしたとも言えよう（怖い痛い目にも合わせられるのを差し引いても…）。

また吉田さんが足をくじいた智子を山頂まで連れて上がってくれたことも大変重要である。山頂に着く前の3人の心中はそれぞれ決して楽しく心躍るようなものでなかっただろう。しかし山頂から美しい風景を眺めることで3人のわだかまりは解け、何か大きなものに包まれるような一体感を共有したように思われる（その後、「苦勞して登って良かったでしょ」と臆面もなく言い放った智子は、呆れた2人に取り残されそうになるのだが）。

筆者は以前、現代の若者が真に他者とのつながりに気づくためには「思い込み」を断ち切り、自分の根っこのところまで掘り下げていくことで「実はつながっている」ことに気づくことが必要であると論じた（今田、2015）。またそのプロセスにおいては、「良いことだから」「必要だから」といった論理的整合性ではなく、河合隼雄（1997a）の指摘を参照し、自らの美意識を刺激され「そうせずにはおれない」という判断や行動といかに結びつけることが出来るのが意外と鍵になってくるのではないかと述べた（今田、2015）。なお当時は、若者の美意識にかられた行動が他者とのつながりの鍵となることの例を具体的に示すことが出来なかったのだが、『わたモテ』の修学修学旅行編、「喪76 モテないし頂上を目指す」こそがその好例であることをここに指摘しておきたい。なお、智子とその友人たちが、エピソードの締めくくりにおいて、皆で横並びになって何かを眺め、心の中でつながりを共有する、という同様のシーンは、その後も「遠足編」の「喪130 モテないし遠足が終わる」および「夏休み合宿編」の「喪175 モテないし合宿が終わる」においても繰り返し描かれていることも注目に値する。

5. 「ヒルコ」とは何物なのか？ — 河合隼雄の日本神話論から —

これ以降は、今まで論じてきたのとは全く別の観点から『わたモテ』の物語世界の構造を見直してみたい。それによって予想外にこの作品が現代日本社会にとって持つ意味の深さが垣間見えてくることを期待したい。

河合隼雄がスイスのチューリッヒ・ユング研究所で、日本人として初めてユング派分析家の資格を取得したことはよく知られている。そしてその際に提出された論文は日本神話に関する研究であった。しかし河合隼雄は帰国後直ちに日本神話を用いて心理学を語ることの難しさや危険をよく理解しており、日本人にとって馴染みやすく感覚的に理解しやすいと思われた箱庭療法や、先述の通りユング派のおとぎ話研究を日本の昔話に応用するなど、題材を選びながら慎重に研究を進めた。『中空構造日本の深層』（1982a）で日本神話の物語構造から日本社会に特有のバランス重視、ないしは無責任体質について鋭く論じ注目を浴びた。しかしその後河合隼雄の物語研究の主眼は先に述べた通り日本の物語文学へと向かい、『日本神話と日本人の心』（2003）を上梓して日本神話に

ついてまとまって世に問うたのはスイス留学から帰国して約40年が経過してからのことである。つまり、ユング派分析家としての河合隼雄にとって、アルファでありオメガである存在こそが日本神話による日本人論だったと言える。その中でも、今後の日本人にとっての最大の課題として論じられているのが「ヒルコ」の帰還についてのテーマである。以下に『日本神話と日本人の心』から抜粋し、「ヒルコ」とはいかなる存在かを示していく。

河合隼雄はヒルコについて、まずこのように述べている。

厳密に言えば、日本神話の全体は、中空均衡構造には収まり切らないのである。その収まり切らない神が、ヒルコであり、ヒルコについて考えてみることは、日本神話を考える上で決定的な重要性をもっている。(p. 320)

そして、古事記における「ヒルコ」の記述について、このようにまとめている。

結婚の儀式において、女性が先に発言したのがよくなかったので「水蛭子」が生まれ、それを葦船に入れて流し去ってしまった。つまり、ヒルコは日本の神々のなかに受け入れられなかったのである。これは、中空均衡構造は、そのなかに対立や葛藤が存在しても、全体的な調和を乱さない限り、そのまま共存し得るところに特徴があると既に述べたことから考え合わせると、極めて異例なことであることがわかる。(p. 321)

さらに日本書紀の記述に基づき、以下のようにも論じている。

ヒルコは三年経っても足が立たないので流し去ったことが述べられているが、ヒルコが、アマテラス・ツクヨミ・スサノヲの重要な三神と共に、その誕生を語られているところが注目すべき点である。つまり、ヒルコはこの三神と匹敵するほどの重要性をもっていた、と考えられる。しかし、ヒルコは流し去られてしまった。(pp. 321-322)

そして、一度は水に流された者が、助かって帰ってくるという物語は世界中の神話・昔話に認められ、その代表としてモーゼやペルセウスを挙げ、神話における中心と辺縁のダイナミクスについて論じ、さらには「ヒルコ」の特異性を説いていく。

この物語の心理的な意味は明らかである。何らかの中心によってまとまっている秩序体系より排除されたものが、周辺部において力を得て、それまでの秩序とは異なる新しい体系をつくりあげる。それこそが英雄なのである。個人の心理として言えば、それまでの人生観・世界観からすれば相容れない、あるいは取るに足らないと思っていたことが、逆に最も重要であることを認識して、世界観がガラリと変改することを意味する。このような中心と周辺のもつ逆説的な意味を、棄てられた子の復活の物語はものがたるのである。

それでは、日本神話におけるヒルコはどうであろうか。ヒルコは流されたまま帰って来なかった。これはどうしてだろうか。それに、ヒルコとはどのような神であったのだろうか。(中略) 中心と周辺という考えからすると、排除される者は中心と相容れない者ということになるが、何しろ日本神話の場合、中空構造なので、中心が空のためそれに反することはできないと思われるが、中空構造そのものに反するときは、やはり排除せざるを得なくなる。このように考えてくると、「日本書紀」でヒルコが三貴子と共に誕生したことから考えて、アマテラス・ツクヨミ・スサノヲが中空構造を形成するとき、ヒルコはそれにいれられなかったと考えられる。このような考えはまた、ヒルコという名が、アマテラスの別名、オオヒルメノムチと対比するとき、ヒルメ(太陽の女性)に対してのヒルコ(太陽の男性)を意味するとなると、ますます支持されることになってくる。ヒルコを男性の太陽神であったと考えると、話が合ってくるのである。それは、あくまで中心にあって全体を統合しようとする存在であり、中空構造とは相容れない。(pp. 323-324)

さらには、日本神話の研究が現代においてどのような意義を持つのかについて、真摯に語られている。

こうして流されたヒルコが、モーゼやペルセウスのように、日本のパンテオンのなかにどのように戻ってくるのか。これは日本神話にとっての課題ではなかろうか。神話はものごとを「基礎づける」(begründen)と言ったの

は、神話学者のケレニイであるが、それはより深い世界への開けも準備するものだ、と筆者は考えている。「基礎づける」ことによって終わるのではなく、新しい問いかけや開拓を内包している。日本神話にとって、ヒルコこそそのような意味をもつものであり、現代において、ヒルコをどのように取り入れるのかを考えるのは意義深い。(p. 325)

現代日本人の課題は、神話的言語によって表現するならば、遠い過去に棄て去られたヒルコを日本の神々のなかに再帰させること、と言えるだろう。しかし、それはほとんど不可能に近いことだ。少々の対立があっても全体に収める中空均衡構造に収まらなかったからこそ、ヒルコは棄てられたのだ。ヒルコを不用意に再帰させると、中空均衡構造は壊滅してしまう。(p. 326)

6. 黒木智子とは何者なのか？

さて、河合隼雄の日本神話論からかなり長く引用したが、それを元に筆者はここに些か大胆な仮説を披瀝してみたい。要するに、黒木智子とはJKの姿となつて現代日本社会に帰還を果たそうとした「ヒルコ」なのである。そう考えると、両者の間には数多くの点で共通点があることが見えてくる。ヒルコは三年経っても足が立たない未熟な存在と見なされた神であるが、智子の外見は小柄で地味であり、大人しい子だけどこかおかしい(喪34)など見なされている。性格も自己中心的で調子に乗りやすい割に小心者で、他人に妬みを感じやすいなど、未熟という属性を強く感じさせる。また、ヒルコは日本の神々のなかに受け入れられなかった存在である。智子も高校のコミュニティの中で受け入れられず「ぼっち」になった。特に高校1年生編での「居場所感のなさ」は切実であった。智子はクラスの一員であるにも関わらず、誰からも友だちとは認められておらず、その姿をヒルコと容易に重ね合わせることが出来る。高校1年生の2学期、智子がどんなに努力しても同級生たちとのつながりが得られない状態の中で「……なんだ!? 私が何をした!? なんてこんな仕打ちを受けるんだ? 前世で56人殺したの?」とおののくシーンがあるが(喪19)、筆者の仮説通りならば、智子は前世の因縁どころか、日本の国生みの際に生じたヒルコの受難を我が身で体現させられていたのである。こうした智子の背負った課題と苦難は、彼女個人の性格や行動にその責任を帰着されるべきものなどではなく、現代の日本社会に生きる我々が皆共通に抱える課題に最も先鋭的に取り組んで苦闘する神聖な姿として捉え直すことが可能だろう。そして、智子は世界の中心ではなく「オタク」という周辺に位置する存在であるが、2年生の後半から高校での人間関係が築けるようになり、どんどん友人が増えてくるに留まらず、周囲の既存の人間関係の枠組みをもどんどん変えていく程の影響力を及ぼすようになる。大げさに言えば「智子に関わることで『わたモテ』の世界が再構成され、作り替えられていく」ような印象すら受ける。また、智子に関わることで、多くの者が自分の中の核心部分を大きく揺さぶられ、変容していく様子が繰り返しさまざまに描かれていく。例えば田中真子(真子さん)は、ゆりが熱を出して休んだ日のお昼ごはんを誰と食べるのかを巡っての行き違いから、自分の中の八方美人的な傾向が智子を裏切り深く傷つけてしまったことを突きつけられ、耐えきれずに嘔吐することになる(実のところ二人とも酷い勘違いをしていただけなのであるが)。また根元陽菜(ネモ)は、いわゆる隠れオタクで声優を目指していることをリア充の友人たちには隠していたが、智子に関わることで「うまく演るのはもういいか」という心境になり、高校3年生の自己紹介でカミングアウトすることになり、そのことで親友の岡田茜と一時仲違いをしてしまうのだが、この二人の仲を仲裁したのも智子だったのである(偶然に大きく助けられてのことであるが)。この二人以外にも、特に3年生になってから、智子に関わることでそれまでの自分のあり方を変えられた者は数多い。そういう意味では、黒木智子とはヒルコが果たせなかった周辺から中心への帰還を果たし、高校というコミュニティにおける世界観や価値観を変容させるという英雄的な行為を現在進行形で成し遂げつつある存在であると読み解くことが出来るだろう。

7. おわりに

まだ連載中のマンガ作品に対し、河合隼雄による日本神話学の最終問題まで持ち出して考察するという些か大胆不適に過ぎる行いをしてしまった観がある。『わたモテ』が完結した段階で、本論文で述べた仮説の前提が崩れてしまい、根底から論旨を組み立て直す必要が生じる可能性もないとも言いきれない。また、本論文の内容について、『わたモテ』のファンからも、あるいは精神医学・臨床心理学の業界関係者からも「これはドン引きだ

!!」「何を言っているの?」「違うけど」等々の誹り・批判を受けるかもしれないことも重々承知している。それでも筆者が「わたモテ」という作品に目を通すたびに、どうしてこんなにも心を揺さぶられるのかという疑問と正面から取り組み、現時点で考え得ることを荒削りながら形に留めておきたいという動機から真摯に執筆に当たったことに些かも恥じるところはない。河合隼雄はエラノス会議で「ヒルコ」に関する講演を行った際に、感極まって絶句し、涙を流したという。「ことばに尽くせない思いがあったことが察せられる」と隼雄の息子、河合俊雄（2009）は述べている。本論文を執筆しているうち、筆者は「この時、河合隼雄にはヒルコの慟哭が聞こえていたのではないか」と夢想する瞬間があった。日本神話には、世界に容れられず流されたヒルコがその胸中にどんな思いを抱いていたのかについての記述は残されていない。しかし、「わたモテ」の主人公である黒木智子の受難と世界への帰還の物語を何度も読み返すうち、智子の心の叫びがヒルコの発していたであろうそれと重なっているように感じられたのである。もとより浅学の身なれば、「ヒルコの帰還」について一気に解決策など示す力量などないことは筆者は重々承知しているが、現代日本社会における「ぼっち」や「ひきこもり」などの問題は「ヒルコ」の帰還という課題といかに内的に取り組むかということにつながっており、臨床実践に取り組む我々は、まずもって今も止まず虚空の地平に響き渡る「ヒルコ」の慟哭に気づくことを忘れてはならないと肝に銘じたい。

最後に、『神話と日本人の心』を締めくくる河合隼雄の言葉を引用しておく。

筆者が、日本神話の研究を通じて、日本のパンテオンにヒルコの再帰を企てるべきだと述べていることも、命がけの仕事であることを、最後に強調しておきたい。(pp. 330-331)

引用文献

- 土井隆義 友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル ちくま新書 2008
- 土井隆義 つなかりを煽られる子どもたちネット依存といじめ問題を考える 岩波ブックレット 2014
- 繪内利啓 マンガから理解する発達障害 めんたるへるす 徳島県精神保健福祉協会 60 2011 72-94
- 橋本治 花咲く乙女たちのキンピラゴボウ前篇 北栄社 1979
- 橋本治 花咲く乙女たちのキンピラゴボウ後篇 北栄社 1981
- 橋本治 熱血シュークリーム上 北栄社 1982
- 今田雄三 セラピスト養成における現代的な問題とその対応―関係性が成立困難な時代に育った世代への指導を通して― 鳴門教育大学研究紀要 28 2013 307-320
- 今田雄三 映画鑑賞を用いた過去の青年期像への共感的理解の試み―映画『コクリコ坂から』を題材とした大学院授業の実践から― 鳴門教育大学研究紀要 29 2014 199-214
- 今田雄三 現代の若者の不安の根底にあるもの―日本的な自我の強さを獲得するための方策を探る― 鳴門教育大学研究紀要 30 2015 243-254
- 今田雄三 過去の子ども像との比較を通して現代の子ども像を考える―映画『となりのトトロ』で描かれた世界観をどう受け止めるか― 鳴門教育大学研究紀要 31 2016 146-157
- 岩宮恵子 思春期のイニシエーション 河合隼雄総編集 講座心理療法第1巻 心理療法とイニシエーション 岩波書店 2000 pp. 107-150
- 岩宮恵子 思春期をめぐる冒険 心理療法と村上春樹の世界 日本評論社 2004
- 岩宮恵子 好きなものにはワケがある 宮崎アニメと思春期のころ ちくまプリマー新書 2013
- 河合隼雄 昔話の深層 福音館書店 1977
- 河合隼雄 現代青年の感性―マンガを中心に 岩波講座子どもの発達と教育6 青年期 発達段階と教育3 岩波書店 1979 pp. 121-140
- 河合隼雄 中空構造日本の深層 中公叢書 1982a
- 河合隼雄 昔話と日本人の心 岩波書店 1982b
- 河合隼雄 子どもの本を読む 光村図書 1985
- 河合隼雄・作田啓一・多田道太郎・津金沢聡広・鶴見俊輔 昭和マンガのヒーローたち 講談社 1987
- 河合隼雄 ファンタジーを読む 楡出版 1991

- 河合隼雄 書物との対話 潮出版社 1993
- 河合隼雄 物語をものがたる ―河合隼雄対談集 小学館 1994
- 河合隼雄 物語とふしぎ ―子どもが本に出会うとき ―岩波書店 1996
- 河合隼雄 アミニズムと倫理 河合隼雄・鶴見俊輔共同編集 現代日本文化論9 倫理と道德 岩波書店 1997a pp. 275-295
- 河合隼雄 続物語をものがたる ―河合隼雄対談集 小学館 1997b
- 河合隼雄 紫マンガラ源氏物語の構図 小学館 2000
- 河合隼雄 物語を生きる今は昔、昔は今 小学館 2002a
- 河合隼雄 続々物語をものがたる ―河合隼雄対談集 小学館 2002b
- 河合隼雄 神話と日本人の心 岩波書店 2003
- 河合隼雄 日本神話と心の構造 ―河合隼雄ユング派分析家資格審査論文― 岩波書店 2009
- 河合俊雄 解題河合隼雄と日本神話 河合隼雄 日本神話と心の構造 ―河合隼雄ユング派分析家資格審査論文― 岩波書店 2009 pp. 243-256
- 河合俊雄 村上春樹の「物語」夢テキストとして読み解く 新潮社 2011
- 川崎克哲 天才柳沢教授の癒セラピィ 講談社 2002
- 織田尚生 昔話と夢分析自分を生きる女性たち 創元社 1993
- SUPER STRINGS サーフライダー21編・著 「あしたのジョー」心理学概論 ―“矢吹丈” その心の病 ユニオンプレス 1993
- 高橋史彦 喪女が国境を越えた4chan民が愛する漫画「私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！」ねとらば 2012. 6. 27公開 https://nlab.itmedia.co.jp/nl/articles/1206/27/news019_2.html (最終閲覧日2020. 9. 30)
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！1 スクウェア・エニックス 2012
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！2 スクウェア・エニックス 2012
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！3 スクウェア・エニックス 2012
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！4 スクウェア・エニックス 2013
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！5 スクウェア・エニックス 2013
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！公式ファンブック スクウェア・エニックス 2013
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！6 スクウェア・エニックス 2014
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！7 スクウェア・エニックス 2014
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！8 スクウェア・エニックス 2015
- 谷川ニコ 私の友達がモテないのはどう考えてもお前らが悪い。 スクウェア・エニックス 2015
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！9 スクウェア・エニックス 2016
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！10 スクウェア・エニックス 2016
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！11 スクウェア・エニックス 2017
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！12 スクウェア・エニックス 2018
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！13 スクウェア・エニックス 2018
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！14 スクウェア・エニックス 2019
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！15 スクウェア・エニックス 2019
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！16 スクウェア・エニックス 2019
- 谷川ニコ・辻真先・青崎有吾・相沢沙呼・円居挽 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！小説アンソロジー 星海社 2019
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！17 スクウェア・エニックス 2020
- 谷川ニコ 私がモテないのはどう考えてもお前らが悪い！18 スクウェア・エニックス 2020
- von Frantz, M.L.: An Introduction to the Psychology of Fairy Tales. Spring Publications. 1970 (氏原寛訳 おとぎ話の心理学 創元社 1979)
- 山中康裕 絵本と童話のユング心理学 大阪書籍 1986
- 山中康裕 ハリーと千尋世代の子どもたち 朝日出版社 2002
- 横田正夫 アニメーションの臨床心理学 誠信書房 2006

Unpopular Woman, Tomoko Kuroki or How She Learned to Stop Being Forever Alone and Become Popular among Friends by Her Mojo

IMADA Yuzo

This paper focuses on the online comic “No Matter How I Look at It, It’s You Guys’ Fault I’m Not Popular!”, analyzing the mind and behavior of the heroine Tomoko Kuroki, a high-school girl, especially in Book 8-9, “School Excursion” part, in which she could form friendship with others. The discussion develops to the realization of Hiruko(Leech-child)’s return, the largest issue of Japanese mythodology argued by Hayao Kawai as his lifework, and tries to make an exciting or even a little bit strange hypothesis.